

ウクライナ 1 年の後：ワシントンと NATO は大きな間違い をしていた

<https://www.infowars.com/posts/one-year-later-in-ukraine-washington-nato-got-it-very-wrong/>

Ryan McMaken | Mises Instituted

March 2, 2023

ロシアのウクライナ侵攻から 1 年経った。体制派とそのメディア連合からの、ロシアは次の第三帝国で、やがてヨーロッパの半分を籠絡するだろうという主張にもかかわらず、それは真理から程遠いものだということがわかった。

実際、事態はほぼ我々が、ここ mises.org で予言した通りに展開した。すなわちロシア人は、東ウクライナ以外には、ヨーロッパのどんな場所にも、近づくことさえしていない。それは 1938 年のミュンヘン（ナチスドイツによる英仏独の協定）ではない。経済制裁はロシア体制を不能にはしていない。世界のほとんどは、この紛争について曖昧な態度を取っている。それは交渉によって解決となる可能性が高い——ワシントンが望んでいることとは逆に。

実際は、アメリカと NATO の、ウクライナ戦争を 3 次大戦にしようとする努力にもかかわらず、ウクライナ戦争は地域の戦争に留まっている。世界のほとんどが、ウクライナでアメリカの政策を果たさせるために、犠牲になることに興味を示さず、その多くが、国家主権の尊重についてのアメリカの言い分の、背後にある偽善を見抜いている。

また、ここには重要な教訓があり、戦争を最大にしようとする者たちは、常に、あらゆる国際的危機の「解決」として全面戦争を提唱することだ。アメリカは明らかに、ウクライナ人の最後の一人まで戦おうとしており、彼らは、これを第 2 次大戦式のグローバルな戦争として考えている。しかし現在、フランス人やドイツ人のような、より実用主義的な人たちは、交渉がより人間的な解決だと認めているようだ。

彼らは「ミュンヘン契機」を求めている

ロシアの侵攻から数日して、西側のグローバルな覇権主義者たちは、この侵略は本質的に地球征服の戦争だと主張する運動を始めた。たとえば「フォリン・ポリシー」の Matthew

Kroenig は、ウラジミール・プーチンは「かつてのロシア帝国を復活させることに、明らかに興味を示しており、他の弱い西ヨーロッパ国——ポーランド、ルーマニア、バルト諸国——が次の餌食になるだろう」と言った。そして直ちに結論して、アメリカの軍事予算を倍増せよと言った。

別の論者は、ウクライナ侵攻は「ミュンヘンの匂いがする」と言った。オーストラリア戦略政策研究所の John Storey は、「忘れられたミュンヘンの教訓」によって、「プーチンはドイツの独裁者アドルフ・ヒトラーを強く思い出させる」と主張した。Storey は不気味にも、「次はバルト諸国と西ヨーロッパだろうか？」と問い、ロシアの戦車が中央ヨーロッパを行進する党の方針を、忠実に予想して見せた。

しかし、絶えず予想され「忘れられていない」と言われる「ミュンヘンの教訓」は、ウクライナの戦争を概念化させるには、決して適切ではなかった。その種のことは、何人かの学者をして、地球的核戦争も「現実的」とさえ言わしめた。しかし、ここで学ぶべき本当の教訓は、1914 年の（第一次大戦前夜の）教訓である。すなわち我々は、軍事同盟をつかって強大国を率い、地球的な災難を引き起こすような、大げさな反動に導いてはならないということである。「ミュンヘン」の群衆は、2022 年初めに、民衆に動員をかけてロシアと戦わせようとした。それはうまくいかなかった——幸いなことに。

ロシアは決してグローバルな脅威ではなかった

初めから明らかだったことは、ロシアは、かなり大きなロシア民族、またはロシア・シンの領域に対して、持ったことのない占領地を維持できるほどの能力を、もっていないことである。これは第 3 帝国（ナチ政権下ドイツ）の軍事能力のようなものでは全くない。したがってロシアの占領が、ウクライナ南東部とクリミア半島にしか、耐えられないものであることは驚くに当たらない。この時点でロシアは、その占領ゾーンの前線を、かなり多くのロシア少数民族の領域の、できるだけ奥深くにまで押し込もうとしている。（その方法は、南北朝鮮を分ける板門店の、幅広い停戦ゾーンをモデルにしていると言われる——訳者）これだけでも、ロシアの体制にとって難しいことがわかっている。ロシアは、その貧困な隣人以外の誰をも、引き受けるほどの力を持っていないのである。

更に言えば、ロシアを難航させるためには、NATO 連合に可能な戦争能力のわずかの部分が必要だけだった。ヨーロッパの NATO メンバーは、ほとんど、より古い武器と、ほんのわずかの精巧な装備を信頼している。ワシントン・ポストは例えば、最近、西側は「まだ信頼できるものではない」と言った。最近の、ドイツ、デンマーク、それにオランダから約束された「レオパード」戦車は、40 年以上も昔に「磨きをかけた」ままであることがわかった。しかもこれらの戦車は、どれも、この夏前にさえ到着できない。

昨年11月の時点で、ドイツ、英国、それにフランスを合わせた軍事援助寄与は、微々たる総額50億ポンドにすぎなかった。それはロシアの軍事予算の6パーセントであり、英国、ドイツ、フランスを合わせた10兆ドルのGDPの、0.05パーセントにすぎない。しかし米軍の援助についてはどうなのか？ 確かに、巨大な額が、ロシアのジャガーノートに対抗するためには必要だ。そこで2023年初めの段階で、米軍の援助は500億ドルにしかない。それは米軍予算の6パーセントでしかなく、米GDPの0.2パーセントである。加えて、米政府は現在、それがウクライナに送っている武器に、何が起きているかさえ知らないことを認めている。その500億ドルのどれくらいが、実際にウクライナの防衛に回っているのだろうか？ 500億ドルではない。

もしそれが、ロシアが東ウクライナで、何とかやっていくのに要するすべてだとしたら、ロシア体制が、ヨーロッパの他の国家はもちろん、西ウクライナに対してさえ、どうして生存の脅威を引き起こせるか考えにくい。これはアメリカがこの紛争にとって、いかに必要がないかを説明する。ロシアはアメリカに対して、どんな脅威にもならない——アメリカが核戦争のポイントまでエスカレートしない限りは。もしヨーロッパの人々が脅威を感じずるなら、彼らは、自分たちの対ロシア経済ブロックの巨大さを考えれば、容易に防衛することができる。ヨーロッパ人は「ウクライナと共に立つ」ための必要以上の力を持っている——それをどう定義しようと。確かにそれは、ヨーロッパ人に対しては、彼らの軍事防衛のために、政府年金と福祉国家の一部を、諦めるように要求するかもしれない。しかし、アメリカの納税者が、長い休暇をもらってカプチーノをすすりながら、ヨーロッパの納税者を助成するために、自分を危なくする必要がどこにあるだろうか？

世界はロシアに敵対して団結してはいない

おそらく、ロシアはその「近い外国」以外には、通常の軍事的脅威を与えないので、世界の大多数は、新しい冷戦を始めることを承諾しなかったのであろう。NATOは、国連がロシアを非難する決議を通過させたことを熱心に主張するが、いかに多くの国家が、その投票をしなかったかを考えてみるべきである。先週、国連総会が、再びロシアの侵略を非難し、ロシアの撤収を求めた。141の国家が賛成の投票をしたが、**32の国家が棄権したことに注目すべきである**（7か国がその措置に反対した）。それら32か国の中には、中国、インド、パキスタン、それに南アフリカが含まれていた。アメリカの同盟国で「世界最大の民主国家」であるインドは、明かに、この決議についてNATOに加わることに関心がなかった。もう1つの大きな世界の経済大国で民主国家の南アフリカもまた、この問題から退去した。実は、BRICSブロックのメンバーで、この決議に投票した唯一の国はブラジルだった。

これは一つには、現実的な問題がかかわっている。これらの国家の政治的リーダーシップは、ワシントンの機嫌を取るために、その国民を貧困化するつもりが全くなかった。しかしこの抵抗はまた、世界のほとんどが、アメリカが国家の主権と国際法を尊重するふりをするのは、すべて偽善であることを、知っていることからきている。アメリカのイラク、アフガニスタン、リビア、シリアに対する、侵略と爆撃キャンペーンは、アメリカの野心に合致すれば、国家主権など、いくらでも踏みにじることができることを証明している。いわゆるルールに基づいた国際秩序は、それがワシントンに都合が悪くなれば、アメリカにとっては明らかに無に等しいものだ。(また注意すべきことは、ウクライナ政府がイラク侵略を支持して、少なくとも 5,000 の部隊を送って、アメリカが主権国家であるはずの国を占領するのを助けたことである。)

こうしたことすべてがロシアにとって何を意味するか？ それが意味するのは、世界の最も大きい経済大国のいくつかが、地球経済からロシアを切り離す計画をもっておらず、ロシアの石油、ガス、食料品から自分を切り離すことを拒否している、ということである。

制裁はロシアを破滅させなかった …… (省略)

「無条件降伏」は決してオプションの一つではなかった …… (省略)

[訳者 Greatchain 注]

ほぼ後の半分を省略したが、全体の趣旨は理解できると思う。ロシアは野心をもった腹黒い集団であり、3 次大戦を起こしてでも倒さなければならないのか？ そのようなグローバリストの宣伝は成功せず、どうやら間違いだったようだ。それどころかロシアは想像より遥かに弱く、自分の仲間のロシア民族を、異常な過激派から護るだけで精いっぱいであり（もちろん、そのために双方に犠牲者が出る）、西側も本音は穏健で、犠牲を払ってまでウクライナを助け、ロシアと戦わねばならぬ理由はないということであろう。

そこであくまでも、ロシアとプーチンを、利己的な悪人として追及しようとするメディアや政府に聞いてみたい。グローバリストが完全に正しいと信ずるならいざ知らず、戦争を収め平和を願うなら、プーチンのロシアに敵対するより、むしろ協力する方が、我々自身の利益になるのではないのか？ 我々は特別に誰かの利益のために、または（ナチスや ISIS は別として）特別に誰かを憎んで、生きているのではなかろう。それともそれは間違いか？